体験区画を併設した市民農園の実態と効果

－岐阜市の市民農園を事例として－

Actual conditions and effects of the allotment garden where the experience division is accompanied

- A case of Gifu City -

三宅康成* 松本康夫*

*Yasunari MIYAKE *Yasuo MATSUMOTO

(*岐阜大学農学部)

(Faculty of Agriculture, Gifu-University)

I 研究の背景と目的

都市近郊に立地する市民農園は、対象となる利用者の居住地からの距離が多少大きくなる反面、大規模な農園用地を確保できるメリットがある。この立地条件を活かして、市民農園に付加価値を付けて、利用者の魅力を増進させようとする試みが見られる。例えば、農業公園の一部に市民農園を取り込んだり、宿泊や食事施設を併設したりする場合がある¹⁾²⁾。本報で取り上げる事例では、市民農園区域の中の余剰農地を用いて、植付けや収穫等の農作業の一部分を体験し、収穫物を手に入れる農園を併設している。これまでも市民農園にもぎ取り形式の農園を隣接させる事例は見られるが、あくまでも展示園的で、市民農園経営の一環としての明確な位置づけを持っているものは少ない。従って、市民農園の枠組みの中でもぎ取り形式の農園を議論した研究はほとんど見られない。

もぎ取り形式の農園は、利用者が継続的に栽培管理をしないため、市民農園には分類されない。主に収穫体験を中心とすることから観光農園に近いが、事前に利用者を募集・特定すれば、オーナー制度的な側面もある。

本研究は、岐阜市の事例をもとに、もぎ取り形式の農園を併設した市民農園の実態を明らかにするとともに、利用者面と財政面から併設の効果と課題を検証することを目的とした。以下、もぎ取り形式の農園を「体験区画」とし、通常

の市民農園の区画を「一般区画」とする。

なお、利用者の属性や意識に関する情報は、一般区画と体験区画の利用者に対するアンケート調査によって得た。一般区画は2000年12月に実施し、172通の回答を得た（回収率72%）。体験区画は2000年11～12月に実施し、186通の回答を得た（回収率66%）。

II 対象農園の概要

農園は、中心市街地から約15km、市の北西部の水田単作地帯に位置する。都市近郊にあって農地が大規模に保全されていたことから、これまで農業振興のための各種の事業が実施、計画されていた拠点地区である。その一環として、岐阜市が市民農園整備促進法に基づき、2000年に遊休農地を用いて市民農園を開設した。総面積は4.5haであり、用地は農家との20年の賃借契約により確保した。

一般区画は256区画で、うち30㎡131区画（12,000円/年）、40㎡64区画（16,000円/年）、50㎡61区画（20,000円/年）が整備された。その他に身体障害者用15区画、学童用10区画も設けられている。利用にあたっては、市内在住者が優先される。初年度は50㎡のみ17の空区画があった。体験区画は利用料2,000円/年（収穫物代金は別途必要）で、大根、枝豆等8作物の播種や収穫を体験（年6回）できる。当初、募集人数を1,000人に設定して臨んだが、実際の

応募者は 368 名（約 37%）であった。農園の付帯施設には管理事務所（シャワー、更衣室含む）、農機具庫（個人貸し出し用ロッカー 51 個含む）、堆肥置場、トイレ、休憩所、駐車場がある。

図 1 農園の位置

Ⅲ 農園の管理・運営

1 仕組み

利用者の情報管理や募集、広報活動、料金徴収、イベントの企画等は市が行っている。農園の管理は JA に委託し、JA は管理者を 3 名雇用し、交代で 1 名を農園に常駐させている。体験区画の栽培管理は地元の農業振興組合に委託している。栽培指導は月 4 回（4～10 月）あり指導員に委託している。肥料販売や耕起を有料で請け負う仕組みをとっている。

広報は新聞やパンフレットの直接配布（農園近隣集落、市内マーケット等）によって行った。

地元農家との関係では、JA が農業振興組合に体験区画の栽培管理を委託したり、農業振興組合が一般区画の耕起を有料で請け負うことによって、地元農家に収入をもたらすとともに、利

用者との関わりを持っている。

2 体験区画の年間予定

2000 年度の体験日時と収穫作物、収穫物の代金を表 1 に示す。体験区画では 1 年間に 7 種類 8 作物を栽培し、その植付けと収穫を体験する。作業体験期間は、植付け時は 1 日、収穫時は 8 日の期間が設定されており、いずれも午前中の作業である。

表 1 体験スケジュール

栽培作物	植付け日	収穫日	収穫量	取得値段(円)	追加料金
春じゃがいも	4/22	6/25～7/9	15株	1,000	1,500円/15株
秋じゃがいも	9/10	11/19～11/26	4株	200	100円/株
枝豆	5/21	7/23～7/30	10株	800	1,000円/10株
スイートコーン		7/23～7/30	8株	700	1,000円/8株
大根		11/19～11/26	13本	1,000	150円/本
かぶ		11/19～11/26	8本	500	100円/本
里芋		11/19～11/26	6株	1,200	200円/株
玉ねぎ	11/19				

(注)空白部分は該当なし

3 行事等

一般区画では 7 月と 11 月の年 2 回に品評会を、体験区画では秋野菜収穫時に収穫祭を行う計画がある。しかし、開設初年度となった 2000 年度は 11 月に収穫祭を 1 回開催するに留まった。体験区画以外の利用者也参加可能である。

4 農園の収支

農園の管理運営費の内訳を表 2 に示す。ここでとりあげるのは主にランニングコストに相当する管理運営に関わる支出であり、ハードの整備費用等は除外している。総額約 1,223 万円のうち、委託料が 835 万円、約 64%を占めている。前述のとおり、委託料は農園の管理委託料として JA に支払われるもので、主に人件費である。消耗品の中には、農具保管ロッカーの増設分（イニシャルコスト）を計上してあるため、支出が若干増加している。通信運搬費は利用者への連絡のための郵送料、電話料等を内容とする。手数料は農園の受水槽、浄化槽の点検、清掃費である。使用料・賃借料は全体の約 18%を占めるが、土地所有者への賃借料と重機等の使用料が含まれている。

一方、収入については、2000 年度は一般区画からの利用料（ロッカーおよびシャワー使用料を含む）が約 345 万円、体験区画で約 182 万円、

合計約 527 万円となっている。体験区画の収入の内訳は、参加者一律に徴収する体験料が 74 万円、別途徴収する収穫物の代金が 108 万円である。

収支を見る限り、かなりの赤字となっていることは明白である。開設主体が市であるため、赤字分は市の財政から補うことになる。本農園のように自治体開設の大規模な農園では、収支を議論する必要性についても意見が分かれると思われるが、それにしてもできるだけ、赤字幅を圧縮する工夫が必要であろう。

表 2 農園の管理運営費（概算）

費目		金額(千円)	割合(%)
需用費	消耗品費	759	6.2
	燃料費	24	0.2
	光熱水費	495	4.0
	印刷製本費	123	1.0
役務費	通信運搬費	513	4.2
	手数料	256	2.1
委託料		7,848	64.2
使用料・賃借料		2,210	18.1
合計		12,228	100.0

IV 一般区画と体験区画の比較検討

1 財政面

先に示したとおり、収入約 527 万円のうち、体験区画から得た額は約 182 万円で 34.5 % を占めている。2000 年度の利用者 1 人当たり to 換算すれば、平均約 4,950 円相当となっている。一般区画の利用者は最大 256 人であるため、これ以上の収入は見込めない。一方、体験区画では、当初 1,000 人の利用者を想定して、区画の確保がされているため、利用者を増加させることによって農園の収入増に直接つながることになる。

2 利用者の特徴

(1) 利用者の推移と分布

表 3 に一般区画と体験区画の利用者の推移を示す。一般区画は区画面積が 3 種類用意されているが、30 m²、40 m²は 100 % の利用があるのに対し、50 m²では 17 区画の空きがあった。体験

区画では、植付け、収穫時の利用者数を 3 時点て集計したもので、どの時点でも 370 人程度の参加が見られた。

利用者の分布を利用圏によって集計したものが表 4 である。一般区画では、5 ～ 10km 圏が 62 % と最も多く、0 ～ 5km の 28 % を合わせると、90 % を占めている。県外者は見られなかった。体験区画においても、5 ～ 10 km 圏が 61 % とピークになっていることは共通の特徴で、近距離からの参加者が多いことを示している。ただ、県外者は 17 %（主に名古屋市在住者）を占め、一般区画と比較すれば遠距離からの利用者が多いことがわかる。ところで、一般区画の利用条件として、市内在住者が優先されることになっているが、空き区画が存在することや区画待ちの人がいないことなどから、この条件によって県外者が排除されたわけではなく、日常的な栽培管理を要する市民農園の性格が反映されたものと捉えることができる。逆に、体験区画では、植付け、収穫のみの利用でよいことが、遠隔地からでも利用し易い条件となっていると判断できる。

表 3 利用者の推移

項目		2000年5月		2000年8月		2000年9月	
		利用者(人)	%	利用者(人)	%	利用者(人)	%
一般用区画	30m	127	96.9	129	98.5	131	100.0
	40m	62	96.9	64	100.0	64	100.0
	50m	39	63.9	42	68.9	44	72.1
	合計	228	89.1	235	91.8	239	93.4
体験区画		364	—	384	—	369	—

表 4 利用者の分布

利用圏域		一般区画(人)	%	体験区画(人)	%
市内	0～5km未満	67	28.0	50	13.6
	5～10km未満	147	61.5	223	60.6
	10km以上	12	5.0	32	8.7
岐阜県内市外		13	5.4	57	15.5
岐阜県外		0	0.0	6	1.6
合計		239		368	

(2) 利用者の属性

利用者の属性を表 5 に示す。一般区画では 50 ～ 60 歳代で 67% を占めており、通常の市民農園の利用者構成と大差はない。体験区画では 30 歳代と 40 歳代で半数以上の 54 % を占め、一般区画と比べて、若い世代に利用されていること

が分かった。職業、住まいの種類、住まいの周辺状況については、両区画で大きな違いは見られなかった。利用形態については、一般区画では子どもの同伴が29%であったのに対し、体験区画では60%を占めるに至っている。

表5 利用者の属性

項目	カテゴリー	一般区画		体験区画	
		度数(人)	(%)	度数(人)	(%)
性別	①男	122	70.9	113	60.8
	②女	48	27.9	73	39.2
	③無回答	2	1.2		
年齢	①20代	4	2.3	4	2.2
	②30代	21	12.2	61	32.8
	③40代	20	11.6	39	21.0
	④50代	57	33.1	52	28.0
	⑤60代	58	33.7	23	12.4
	⑥70代	11	6.4	6	3.2
	⑦無回答	1	0.6	1	0.5
職業	①会社員・公務員	73	43.0	103	55.4
	②自営業	19	11.0	14	7.5
	③無職	59	34.3	59	31.7
	④その他	19	11.0	10	5.4
	⑤無回答	2	1.2		
住まいの種類	①一戸建て(菜園あり)	22	12.8	30	16.1
	②一戸建て(菜園なし)	123	71.5	113	60.8
	③アパート・マンション	26	15.1	42	22.6
	④その他	1	0.6	1	0.5
住まいの周辺状況	①ほとんど宅地	95	55.2	101	54.3
	②住宅の間に農地あり	53	30.8	48	25.8
	③農地が多い	24	14.0	36	19.4

3 農園に対する意識

(1) 利用目的と達成度

区画を利用する目的を選択(複数回答可)し、各目的についての達成度を5段階で評価してもらった。達成度は「十分に達成」を5点、「全く」達成されず」を1点として、得点化して平均値を求めた。一般区画と体験区画の利用目的と達成度の評価を図2に示す。

両方の区画で共通して選択されている項目は、「安全・新鮮な野菜」、「土・作物とのふれあい」である。一般区画では、「健康増進」、「くつろぎ・安らぎ」、「趣味・生きがい」が高い割合を占めているのに対し、体験区画では、「家族の団らん」、「子どもの情操教育」の目的が高くなっている。体験区画では若い世代が多いことが目的の違いに影響していると考えられる。

目的の達成度は3が中間の評価になる。両区画とも全体的に3.5～4.0の達成度が得られている。目的として多く選択された項目の達成度は概ね良好であると判断できる。ただ、「利用者間の交流」については、目的として選択された割

合は低かったが、達成度は特に体験区画で2.5と低くなっている。交流を希望する利用者としては、現在の交流形態では達成感がやや乏しいようである。

図2 利用目的と達成度

(2) 区画の選択理由

一般区画利用者には体験区画を、体験区画利用者には一般区画を利用をしなかった理由を尋ねた。結果を表6に示す。

一般区画利用者は、一連の栽培管理を自分で行うことや栽培作物の種類を自由に選択することを希望していることが選択理由となっている。農業に対する関わりを強く持ちたい利用者であると捉えることができる。一方、体験区画利用者は、日常の区画の管理の困難さと作物を栽培するための知識、経験に乏しいことが理由で、一般区画よりも簡単に利用できる体験区画を選択したようである。

表6 他の区画を利用しない理由

項目	理由	度数(人)	%
体験区画を利用しない理由 (一般区画利用者) 141人	①興味がないから	29	20.6
	②好きな作物を栽培したいから	115	81.6
	③全ての栽培管理をしたいから	50	35.5
	④頻繁に農園に通いたいから	27	19.1
	⑤その他	15	10.6
	⑥無回答	37	26.2
一般区画を利用しない理由 (体験区画利用者) 159人	①興味がないから	12	7.5
	②日々の管理作業が面倒だから	58	36.5
	③日々の管理が時間的に無理だから	117	73.6
	④利用料金が一般区画より安いから	11	6.9
	⑤栽培に関する知識や経験がないから	94	59.1
	⑥他の市民農園を利用しているから	3	1.9
	⑦その他	10	6.3
	⑧無回答	28	17.6

(注) 両項目ともに複数回答

(3) 体験区画利用者の参加状況

体験区画では、2000 年度は 7 回の植付け、収穫作業を設定した。各作業への参加状況を表 7 に示す。植付け、収穫別に見ると、収穫作業への参加が圧倒的に多く、68 %～81 %を占めているが、植付けの参加者は 5 %～34 %と少ない。利用者は収穫体験への希望が強いようである。ただ、いずれにも参加しなかった割合は 3 %にすぎず、不参加の理由では、「興味がない」といった根本的なものはほとんど選択されなかった。

表 7 体験作業への参加状況と不参加の理由

項目	カテゴリー	度数(人)	(%)
里芋の植付け	①参加した	59	31.7
	②不参加	126	67.7
	③無回答	1	0.5
枝豆の植付け	①参加した	63	33.9
	②不参加	122	65.6
	③無回答	1	0.5
秋じゃがいもの収穫	①参加した	141	75.8
	②不参加	44	23.7
	③無回答	1	0.5
体験 枝豆・スイートコーンの収穫	①参加した	151	81.2
	②不参加	34	18.3
	③無回答	1	0.5
秋じゃがいもの植付け	①参加した	34	18.3
	②不参加	151	81.2
	③無回答	1	0.5
大根・かぶ・里芋・秋じゃがいもの収穫	①参加した	126	67.7
	②不参加	59	31.7
	③無回答	1	0.5
玉ねぎの植付け	①参加した	9	4.8
	②不参加	176	94.6
	③無回答	1	0.5
いずれにも不参加	①はい	5	2.7
	②いいえ	180	96.8
	③無回答	1	0.5
作業体験に参加しなかった理由*	①他に用事があったから	97	52.2
	②体験内容に興味なかったから	8	4.3
	③交通手段がなかったから	9	4.8
	④体験区画に関心がなくなったから	2	1.1
	⑤その他	16	8.6
	⑥無回答	77	41.4

*複数回答

(4) 満足度と利用意向

利用者の満足度と利用意向を図 3、図 4 に示す。40～60 %の利用者が満足しており、20 %程度が不満に感じている結果となった。一般区画よりも体験区画で、満足している利用者の割合が高くなっている。

今後の利用意向では、一般区画が 88 %が継続利用意向を示し、体験区画は 62 %に留まり、「わからない」が 28 %を占めている。この点からリピーターを確保する面からは、一般区画の方が安定的であると解釈できよう。言い換えれば、

一般区画は継続的な利用が見込まれるが、体験区画は流動的な側面を持っているということである。これは、利用者の魅力を引きつける仕組み、工夫が必要なことを示唆している。

また、体験区画から一般区画への移行を希望する者は 15 名 (8 %) であり、一般区画から体験区画への移行の希望は 1 名に留まった。体験区画の設置によって、一般区画の利用者が増加することは、体験区画のプラスの効果であると言える。

図 3 利用者の満足度

図 4 利用意向

V 考察

市民農園に観光農園の性質を持つ体験区画を併設した効果と課題を検討する。

一般区画では 3 市 2 町 1 村からの利用者に対し、体験区画では 6 市 14 町 1 村からの利用者がいる。体験区画では、より遠隔の在住者を取り

込んでいる。利用者に行ったアンケート調査からは、一般区画と体験区画では、利用者の属性、利用目的に顕著な相違が見られた。体験区画では子どもを同伴した若い世代の利用が多いようである。利用目的については、一般区画では「健康増進」、「くつろぎ・安らぎ」、「趣味・生きがい」が多いのに対し、体験区画では「家族の団らん」、「子供の情操教育」が多い。これらの結果から判断すると、体験区画を併設したことで、利用圏、年齢層、利用目的等から見て、一般区画で得られる以上の広範な利用者の確保に繋がった。また、体験区画の設置によって、新たに一般区画の利用希望者の掘り起こしが可能である点も評価すべきであろう。

財政面から見ると、利用者数が頭打ちとなる一般区画のみでは、利用料を上げない限りこれ以上の収入の増加は望めないが、体験区画の開設によって、いくらかの収入の増加に貢献した。ところが、支出（1,223万円）がことのほか大きく、大幅な赤字となっている。開設側としては、当初、体験区画で利用者数 1,000 人、収穫物もほとんど購入されるという想定での収支設定であったので、利用者が想定外の 4 割弱しか満たなかったことが、赤字を縮小できなかった原因の一つとなっている。また委託料が約 840 万円となり、人件費に約 64 % を費やしていることも見逃せない事実である。人件費は、地元農家へ還元されるもので、地元から見れば経済的にうるおう効果を持っている。しかし、できるだけ市からの持ち出しを少なくし、市民農園の経営を安定させるためには、人件費を削減する工夫が是非とも必要である。

今後の課題を考察すれば、まず、体験区画での利用者数をできるだけ増加させる努力が必要であろう。現在、体験農園の広報活動は、市内および近隣市町村に留まっている。観光農園やオーナー農園の利用圏域は、時間距離にして 2 時間ぐらいまでに及んでいることが分かっている³⁾。本農園でも、実際に他県からの利用者も見られることから、広報の仕方が重要なポイントになる。ここでは 1,000 人までの利用者を受け入れるだけの能力があるため、できるだけ、広報活動のエリアを広げ、遠隔地の利用者を取り込むことが課題である。また、人件費を削減するためには、一般区画の利用者に、体験区画の運営に協力してもらうなどの試みも考えられる。幸いに、割合は少ないが、一般区画には交流を目的とする利用者も存在している。現状では一般区画、体験区画ともに交流の達成度は低いと、交流機能を強化する意義があるのではないだろうか。利用者の運営参加による人件コストの削減も検討の余地がある。

謝辞：本研究において、岐阜市農林課の松久丘氏には資料のご提供やアンケート調査のご協力を賜りました。また、データ整理では専攻生の中川和弥君にお世話になりました。各位に深甚なる謝意を表します。

[参考文献]

- 1) 前田健一他(1999):農業公園に開設された市民農園の意義と課題—安城産業文化公園「デンパーク」の場合—, 農業土木学会京都支部研究発表会講演要旨集, pp.12-13.
- 2) 東正則(2000):宿泊型市民農園, 東京都農業会議, pp.1-51.
- 3) 三宅康成, 松本康夫(1996):オーナー農園を通した都市・農村交流, 農業土木学会誌, Vol.64, No.8, pp.41-46.

This research aimed to clarify the actual conditions and effects of the allotment garden where the experience division is accompanied based on the case of Gifu City, from the viewpoint of a user side and a financial side.

As a result of the analysis, remarkable differences were seen in user's attributes and use purposes between users of the allotment division and the experience division. In the experience division, the tendency to which the use sphere region expanded was seen. The establishment of the experience division contributes to securing of a lot of users more than obtaining by the allotment division. On the other hand, it is a problem that the labor expenses is large though the installation of the experience division contributes to an increase in the income. It was pointed out that reducing labor expenses, and increasing the user of the experience division were necessary in the future.